嘉納治五郎とピエール・ド・クーベルタン
「精力善用・自他共栄」とオリンピズム

阿部生雄

1．はじめに

本稿は定年退職を意識した随想である。2003（平成15）年4月から2008（平成20）年3月にかけて筑波大学附属中学校の校長を務める素晴らしい機会を得た。十分にその任務を果たすことはできなかったが、教育の大切さを学び直すかけがえのない時を過ごすことができたと思っている。毎週月曜の昼に、校長が生徒に語りかける全校集会があり、その話を準備することに追われたが、附属中学校の配慮によりその一部を『<みなさん、今日は>　－向上心への呼びかけ－』として出版することができた。本稿は、そうした附属中学校の校長時代に考えたことの一端である。

2006（平成18）年、山口正副校長が附属中学校に所蔵されている嘉納治五郎先生揮毫の掛け軸を見せてくれた。そこには、「善應用心身之力者謂之柔道　甲南」と書かれてあった。もと武道論の教授で先代の附属中学校の校長でもあった入江康平先生によると、甲南とは嘉納先生が60歳以前に使用していた雅号であるという。嘉納先生が高等師範学校の校長を退官されたのは1920（大正9）年1月、60歳のことである。同じ言葉を書いた揮毫が『柔道百年』の口絵の一つに掲載されているが、その雅号は60歳代の頃用いたといわれる「進呼齋」である。[1]　嘉納先生のこの言葉と揮毫の成立を実証的に解明することは嘉納治五郎研究者に委ねたいが、嘉納先生が高等師範学校校長を辞される以前に書かれた「書」であることは確かなことのように思われる。

嘉納先生の最も有名な言葉は1922年（大正11）に講道館文化会が創立された頃から盛んに主張され始めるようになった「精力善用・自他共栄」であろう。しかしこの言葉が嘉納先生の思想、あるいは柔道理論を最も代表するものとして登場するまでには、幾つかの思想遍歴を示す言葉が存在していたこともよく知られている。ここで嘉納治五郎研究を意図して、その点を学問的に解明しようなどという考えは寸毫もないことを予め断っておく。ここで述べようとすることは、嘉納治五郎先生が東京高等師範学校とその附属中等学校の校長を兼務していた頃の揮毫をヒントに、もしかすると先生の考えと近代オリンピックの創始者であるピエール・ド・クーベルタン男爵の考えとの間に類似性や相関があるかもしれない、という一種の憶測、空想でしかない。

2．柔、有効、善、共栄

「柔よく剛を制する」は、中国の兵書『三略』の「柔能く剛を制し、弱能く強を制す。柔は徳なり、剛は賊なり。弱は人の助くる所、強は怨の攻むる所」に由来するという。嘉納先生が指導を受けた起倒流では「弱にして強を制し、わが力を捨て敵の力を以て勝つ」と説いていたという。[2]　嘉納先生は明治20年頃にその「柔」を技術的基礎にはっきりと据えたといわれる。[3]　嘉納先生自身も「柔道とは柔の理を応用して対手を制御する術を練習しまたその理論を講究する学科」と回顧したように[4]、「柔」は極めて技術論的意味合いの強い言葉であったと思われる。しかし、1898年（明治31）8月に造士会を創立し、その10月に『国士』を創刊した嘉納先生は、1899年（明治32）1月に「柔道の柔の字の意味は、柔能制剛の柔の意味に当たっている。柔道が相撲などとは全く違って、高尚な理論が伴っている修行であり、外国の人々がその理論を聴いて、いつも、世界に類のない巧妙な修行であるというて嘆賞するは、全くこの柔の理に基づいて勝ちを制するという点にあるのだと思う」[5]と述べ、柔道の修行が究極の勝利を柔の理によって得ることであるとしている。嘉納先生の修行論は、老子の思想に見られる「柔」の影響

＊ 筑波大学大学院人間総合科学研究科

を受けていると同時に、既に実践的な哲学として「柔」を捉えようとしていたことが理解できる。

しかし、そうした「柔」の理論から、そこに論理内在的に、また半意識的に含まれていた「有効」という新たな原理が、炙り出されてくる。嘉納先生は1915年（大正4）1月に創刊した『柔道』で連載し始めた「講道館柔道概説」において、「柔道は心身の力を最も有効に使用する道である」[6]と定義するようになる。そして1919年（大正8）に『柔道』という雑誌も『有効乃活動』と改題されたのであった。しかしこの頃、冒頭に紹介した「善應用心身之力者謂之柔道」という言葉が用いられるようになる。これを仮に「心身の力を善く応用するもの、これを柔道という」と読むとしよう。するとこの言葉は、「柔道は心身の力を最も有効に使用する道」という有効性を強調する言葉から、「精力善用・自他共栄」という力の「善」用を強調する言葉に移行してゆく過渡期に主張されたものと考えることができるのである。ここでは、心身の力を「能く」ではなく、明らかに「善く」用いることを意識的に強調しているからである。

既に述べたように、「精力最善活用」や「精力善用・自他共栄」という言葉が強調されるようになるのは、1922年（大正11）4月に講道館文化会を創設した頃からである。その創設の趣旨には「我が同志は多年講道館柔道の研究によって体得した精力最善活用の原理を応用して世に貢献せんと決心し新たに講道館文化会を設くることにした」とされ、宣言では「本会は精力最善活用に依って人生各般の目的を達成せんことを主義とす。本会はこの主義に基づいて、一、各個人に対しては身体を強健にし智徳を錬磨し社会に於いて有力なる要素たらしめんことを期す、二、国家については国体を尊び歴史を重んじ其の隆昌を図らんが為常に必要なる改善を怠らざらんことを期す、三、社会に在っては個人団体各々互に相助け相譲り徹底せる融和を実現せしめんことを期す、四、世界全般に亘っては人種的偏見を去り文化の向上均霑に務め人類の共栄を図らんことを期す」とされている。さらにその綱領では「一、精力の最善活用は自己完成の要訣なり、二、自己完成は他の完成を助くることによって成就す、三、自己完成は人類共栄の基なり」として「自己完成」を最重要の狙いとしたのであった。[7] こうして「柔道」の原理は心、技、体、精神、生活、社会、国家、国際の全てに貫かれる「自己完成」という修養の最終目的、共栄という相互扶助を目指す根本原理を実現するものとなり始めたといえよう。

1925年（大正14）に嘉納先生は『精力最善活用自他共栄』の中で「キリスト教も、儒教も佛教も、みなそれと協調して行くことのできるものであると、私は信じております。その案は、社會生活の存続と発展と原理に基いて道徳を説くので、その條件とか原理とかいふものは如何なるものであるかといふに、それは、互いに助け合ひ、我と他とが共々に榮るといふことになるのであります」[8] と主張するようになる。こうした主張の背景には、藤堂良明先生によると嘉納先生の外遊の影響があるという。嘉納先生が最初に訪欧の旅に出たのは1889年（明治22）9月、帰国は1891年（明治24）1月であるが、その際にパリに立ち寄り、パリ大学副学長のオクタブ・グレアールと初等教育長のフェルディナン・ブイッソンと会談したことがあるという。その後、1920年（大正9）の第7回オリンピック大会（アントワープ）で訪欧した際にブイッソンと再会したといわれ、嘉納先生はブイッソンを「仏国において宗教を離れて道徳を説く最も有力なるひとりである。かつ実行家である」と評価しており、彼との交流から「特定の宗教よりも道徳の立場から＜自他共栄＞論が生まれた」と指摘している。[9] ここでは、そのような指摘を念頭に入れつつ、もう少しクーベルタン男爵の「オリンピズム」理念の推移と嘉納先生の「柔道」理念の変化を重ね合わせてみたいと思う。

3．『競技教育』と自由な努力、鍛練、肉体と性格の筋肉文化

ピエール・ド・クーベルタン男爵がイギリスの教育を学ぶために渡英したのは1883年（明治16）のことである。嘉納先生が神田神保町の弘文館の土蔵に道場を移した頃である。クーベルタン男爵は1886年に『社会改革』（La Réforme Sciale）紙上で『イギリスの教育：ハロー校』（Le Colléges anglais, Harrow School）を書き、その後、立て続きにイギリス教育の論考を発表した。イギリスのスポーツ教育について書いた『競技教育』（L'Éducation ahlétique）がフランス科学推進協会で発表されるのは1889年（明治22）のことである。嘉納先生が講道館を創始したのが1882年（明治15）、「柔よく剛を制する」を力説し始めたとい

われるのが1887年（明治20）であるから、柔道の体系化はクーベルタン男爵の競技教育の普及構想よりも一日の長があったといえよう。しかし、武術ではなくイギリスのスポーツ（競技）を一種の「普遍文化」として国際的に普及しようとした点では、明らかにクーベルタン男爵の方に一日の長があった。

『競技教育』において、クーベルタンは「スポーツとは自由な努力です。それは闘争です。それは鍛錬です。肉体と性格の筋肉文化（muscular culture）なのです」[10]と述べ、「スポーツは人間の理想、意志の勝利へと真直ぐに導いてくれるものであることが分かります。スポーツが偉大で哲学的であるというのはそうしたことからなのです。それは、われわれを古代のストア派の教義へと引き戻してくれるのです。確かに、その教義は、後世の人々によって多くの誤りや行き過ぎを指摘されましたが、その高貴さと純粋さは批判されたことはないのです」[11]としてストア的鍛練、自発的努力、自己を高めるための闘争という「肉体と性格の筋肉文化」の考え方を提起した。クーベルタン男爵はこうした考えを終生変えることはなかった。

クーベルタン男爵は、ルプレ（P.G.F. Le Play）の「社会改革」という思想感化、パシャル・グルッセ（Paschal Grousset）の組織する学生競技会であるランディ（Lendit）との対抗関係、サンクレール（Georges de Saint-Claire）との妥協という環境の中で、フランスの学生競技の組織化に取り組んだ。1892年（明治25）11月20日から1週間、男爵はソルボンヌ大学でフランス・スポーツ競技連盟（Union des Sociétés Francaise de Sport Athlétique）の5周年記念を開催し、その式典で古代オリンピックの復活を提唱した。そして1894年（明治27）、12カ国79名の代表者を招いて国際オリンピック委員会（International Olympic Committee）を結成したのであった。嘉納先生が東京高等師範学校校長となったのは1893年（明治26年）のことである。この時点で、クーベルタン男爵も嘉納先生も、共に、身体的な鍛練と努力を通じて向上心あふれる若者を育成しようする「組織的」な修養プログラムを構想し、実践しようとしていたことがわかる。

4.「より速く、より強く、より高く」、ストア的向上心、有効な努力

1891年3月17日にアンリ・ディドン神父（Father Henri Didon）が、彼の学校の最初のスポーツ大会の折りに「より速く、より高く、より強く」（Citius, Altius, Fortius）という言葉を生徒たちに話したことは、有名な話である。これが、1894年の国際オリンピック委員会設立の際に、そのモットーとなったのであった。この言葉は『公教育ノート』（Notes sur L'Education publique 1901）の「スポーツの心理学」（La psychologie du sport）で指摘されたように、スポーツの記録向上のみを意図するものではなく、より高度なものを求める「性格」を導きだし、少しでも高い目標を目指してそれを克服しようとする「有効な努力」を訴えようとするものであった。クーベルタン男爵は、自分の信奉するストア派の鍛練主義に若者を誘おうとして、この標語をイルミネーション化しようとしたのであった。少々長くなるが、クーベルタンの「修養」の考えがよく窺える部分を引用しておこう。

> 「比較的たやすく、われわれは与えられた仕事を達成するのに必要ないくつかの性格を得ることができる。義務あるいは想像力がそうした性格をもたらし、習慣はそれらを当たり前のものにする。しかし、そうした性格は限定的な、あるいは特殊的なものである。それらはある状況の中で、ある目的のために―常に同じ状況と目的のために―前面に現われるのである。難しいことは、それらをあらゆる状況、あらゆる目的にまで拡大することなのである。このために人は習慣を意志に代えなければならない。意志！　それこそがスポーツを実りある有益なものとし、スポーツを＜男らしくする＞（virilization）ための手段にする。私がいま述べたような働きや同様の他のものにおいて、＜有効な＞努力はすぐに限界に達する。その限界点を越えて頑張ることは必要ないだろうし、賢明なことではないだろう。どこまで行うのか？　知性ある働き手は可能な限り最少の時間と最少の疲労で最高の仕事を果たそうとする。スポーツマンは依然として功利的関心をかえりみない。自らが達成しようとする仕事は自らのために設定する。彼は翌日の生活費を稼ぐために自分の仕事に戻る必要がないから、自分のエネル

ギーを温存する理由がないのである。このようにして彼は努力のために努力することができ、障害を探し出し、自分の道にいくつかの障害を置き、そして彼が達成しなければならない水準よりも少しばかり高い目標を目指すのである。その考えこそ、競技協会を結成したArcueilの生徒たちのためにディドン神父によって選ばれたモットーによって最もよく表現されているものなのである。その最初の運動会で、彼は＜citius, altius, fortius！より速く、より高く、より強く！　これが君たちの標語だ＞と生徒たちに語りかけたのだ。あたかもスポーツを越えて哲学の領域に立ち入ったかのようである。この言葉は新しいものではない。古い時代のストア派の言葉だ。ギリシアのジムナジウムはしばしば偉大な思想家の無名の弟子たちによって発せられる同様の言葉が飛び交っていたのだ。そしてこの男らしさの秘訣が文明人の間で失われてしまうなどとは思いもしなかった素朴なジムナスティークの教師たちによって繰り返し叫ばれていたのだ。」[12]

クーベルタン男爵は明らかにストア派起源の向上心の普及を意図していた。しかし、その向上心の主張は、妙に日本の「修業」と共鳴し合うものであった。

5.『実用的ジムナスティーク』、有用、有効、実用、功利

いま述べた1901年の『公教育ノート』の中に、性格形成に果たすスポーツの役割に加えて、既に「有用」や「有効」や「功利」に注目する発言が見られる。クーベルタン男爵は1903年には実用的ジムナスティーク普及委員会（Comite de la Gymnastique utilitaire）を組織し、1905年には20世紀の青年の教育シリーズの体育編で『実用的ジムナスティーク』(La Gymnastique utilitaire) を著した。清水重勇先生によれば、クーベルタン男爵は、既に1891年には、遊戯・スポーツは体操よりも古くから存在するのだから、体育におけるスポーツはスポーツによって、即ち「実用的競技」(athlétique utilitaire) という姿であるべきだという主張を抱いていたという。[13]　科学的、医学的、衛生学的根拠を持ち、近代的基礎理論を持つ体操が優位な時代にあって、クーベルタン男爵はこの本に『実用的ジムナスティーク』という名を冠して、その「名称よって彼の行動目標である＜スポート＞の教育化をカモフラージュ」しようとしたのだという。[14]

実用的ジムナスティークは、「救助」と「防御」と「ロコモーション」という三つの領域から構成される。救助は「陸上救助：走、跳、投、登」と「水中救助：飛び込み、潜水、平泳ぎ」からなる。防御は「剣術：ボクシング、フルーレ、エペ、サーベル、棒術、レスリング」と「射撃：標的射撃、スキート射撃」からなる。ロコモーションは「動物的ロコモーション：歩行、騎乗」と「機械的ロコモーション：漕艇、帆船、自転車、自動車、スケート、スキー、気球」からなる。[15] しかし、こうした「実用的ジムナスティーク」は説得力を欠いたことから熟成せず、次第にクーベルタン男爵は「スポーツ」という言葉を主に用いて行くことになる。

しかし、この実用的ジムナスティークを唱えていた頃、クーベルタン男爵は「デブルイヤール」(debrouilliord) と表現される若者像を求めていた。それは「確かな腕を持ち、いつでも努力を発揮し、しなやかな筋肉と持久力を備え、素早い一瞥と確乎たる決断力を有する少年、近代社会の豊かな不安定状態のために必要とされる環境、職業、状況、慣習、思想などの変化に対して、前もって鍛えられている少年である」というものであった。[16]　このようにクーベルタン男爵は、「有用」、「有効」、「実用」、「功利」を包括する原理＜utilitaire＞と、それを身につけた努力を惜しまぬ柔軟な若者＜debrouilliord＞を求めていたのであった。「有用／有効／実用／功利」の主張は、嘉納先生が国際オリンピック委員を依頼される4年以前迄には、クーベルタン男爵によって強いメッセージ性をもって主張されていたのであった。

クーベルタン男爵の依頼を受けた「駐日フランス大使のゼラール (Gerard)」が嘉納先生に会ったのは1909年（明治42）春とされている。[17]　そして、嘉納先生が第5回大会（ストックホルム）に出発したのは1913年（明治45）6月7日、帰国したのは1913年（大正2）3月6日で、9カ月に及ぶ欧米視察でもあった。[18] 嘉納先生は帰国して早々に「欧米巡遊所感—我が国普通教育の五大方針」（上・中・下）を『教育時論』に、「いかにして世界列国と融和すべきか」を『教育之実際』に、

そして「欧米巡視所感—体育の方針」を『教育時論』に発表した。ストックホルムでの第5回大会と欧米の視察に関しては、「欧米巡視所感」が興味ある。この中で、嘉納先生は、大会後に欧州各国とアメリカ合衆国の体育事情を視察し、そこで受け止めた印象を記している。

この欧米旅行で「普通体操」、より一般的に言えば体操に対する懐疑を強めている。嘉納先生はスウェーデン体操の本元であるスウェーデンですら「戸外遊戯」が主流となっており、戸外運動を「有効」と認めてこなかったドイツも次第にその必要を認めるようになってきているのであり、「普通体操のごとき運動をもって、国民体育の主となるものとするということは出来ぬ」とし、「身体鍛錬上、普通体操および兵式体操はほとんど無効である」と結論しているのである。19

更に、アメリカではコロンビア大学でアメリカ新体育の泰斗トマス・ウッド博士（Thomas Denison Wood）と会見し、普通体操は体を均一に発達させる点で優れているが、戸外遊戯などは身体の一部に「偏頗」するものの「低い度で平均的に発達しておるよりも、多少の偏頗を顧みずして、平均上高い度に発達した方が」よいという考え方に共感している。嘉納先生はオリンピック競技会の参加を一つの重要な契機として、「盛んに戸外遊戯を奨励せねばならぬ」と主張し、国民体育の方法として、時間、経費等の点を考慮して、「歩む、飛ぶ、駈ける、泳ぐを唱導するのである、なお歴史的の理由をもって、柔道剣術などを加えると一層結構である」と締め括っている。[20]こうしてみると、嘉納先生の「体操」に対する限定的評価や、「国民体育」の主要な内容として主張される「戸外遊戯」の種目は、クーベルタン男爵の主張する「実用的ジムナスティーク」（スポーツ的なもの）と意外と近い関係にあるように思われるのである。日本において、既に徒歩や水泳、柔道によって体育の普及を試みていた嘉納先生にとって、クーベルタン男爵の「実用的ジムナスティーク（スポーツ）は、目新しいものというよりも親近感のある「戸外遊戯」（スポーツ）と映じたことであろう。

一方、嘉納先生は、1915年（大正4）1月には『柔道』創刊し、その2月号から「講道館柔道概説」を連載し始めた。その中で「柔道とはなんぞや」と問い、「柔道は心身の力を最も有効に使用する道である」と定義し、「柔道の修業は攻撃防御の練習によって身体精神を鍛練修養し、斯道の真髄を体得することである。そうしてこれによって己を完成し世を補益するが柔道究竟の目的である」とその目的を掲げたのであった。[18]「心身の力を最も有効に使用する道」という考えは、クーベルタン男爵の『実用的ジムナスティーク』や『公教育ノート』にみられた「有用／有効／実用／功利」の考えに極めて近接していると思うのだが、どうであろうか。このように「柔道」が単なる技術論を起点とする修養理論を越えて一種の社会哲学へと変質し始める原因については、柔道関係者やオリンピック運動関係者のみならず、体育・スポーツや教育の関係者によって解明されるべき重要な点であるように思われる。その際に、クーベルタン男爵の思想との関係が重要な問題となるだろう。

6.『スポーツ教育学』、オリンピズム、エネルギーの宗教、進歩

一方、クーベルタン男爵の思想も進化する。1918年、クーベルタン男爵はオリンピズムとは何かという問いに対して「それはエネルギーの宗教であり、しっかりとした衛生学や公共精神に基づき、芸術や思想に包まれて、男性的なスポーツを行うことによって発達を遂げた強固な意志の修養である」[19]と答えている。更にエイケムはクーベルタン男爵のオリンピズムを「努力の祭儀、危険を顧みないこと、祖国愛、寛容、騎士道精神、芸術・文化との触れ合い、これらがオリンピズムの基本である」[20]と指摘している。1910年代末において、オリンピズムはスポーツを通じた強固な意志の修養であり、人間としての完成を目指す努力の祭儀でとして位置づけられている。

もっとも注目すべきは1919に出版された『スポーツ教育学—スポーツ運動の歴史、技術、道徳的社会的影響』（Pédagoie sportive, histoire des exercices sportifs, technique des exercices sportifs, action morale et sociale des exercices sportifs）であろう。この本は表題が示すように、第一部でスポーツ運動の歴史、第二部でスポーツ運動の技術論、第三部でスポーツ運動の道徳的社会的価値論の三つの部分で構成されている。その理論的基礎は『実用的ジムナスティーク』や、1906年から1913年にかけて『オリンピック誌』（Revue Olympique）

に連載されたスポーツ心理学の論考をまとめた『スポーツ心理学試論』(Essais de Psychologie sportive, 1913) である。しかし、クーベルタン男爵固有のスポーツの定義がこの『スポーツ教育学』の序に見出される。「スポーツは進歩を求めて行う強度の筋肉的努力にたいする自発的な崇拝と習慣で、危険をも顧みないものである」[21]という定義である。彼にとってスポーツは、自己向上と社会進歩に向けて、自ら進んで激しい筋肉的努力よって修養を重ねるストア的鍛練のことであった。しかし、彼のそうしたスポーツ理解は、妙に日本の「修業」と共鳴するものでもあった。このクーベルタン男爵の「進歩」を追い求める啓蒙主義的なスポーツ理解において、「進歩」とは限りなく「善なる」ものへと向上してゆくという信念に他ならない。それは、自己をより「善」なる存在へと向上させ、社会をより「善」なる状態に向上させようとすることなのであった。

クーベルタン男爵のオリンピズムとスポーツの理解が、たとえストア主義へと回帰し収斂してゆくものであったとしても、それらを表現しようとするクーベルタン男爵の繰り出す「鍛錬」、「肉体と性格の筋肉文化」、「進歩」、「エネルギーの宗教」、「スポーツの宗教」、「競技宗教」というあやなす言葉や、自己向上、自己完成、社会進歩、国際平和と祖国愛、努力の祭儀と意志の修養へと誘う精神は、必ずや嘉納先生の修養の哲学と共鳴したに相違ないのである。藤堂良明先生は、嘉納治五郎先生の「精力善用・自他共栄」に東洋思想以外の西洋思想の香りを嗅ぎ分けているが、恐らくそこにはクーベルタン男爵のオリンピズムとスポーツの幾分かの香りも含まれているのではないだろうか。

7．おわりに

嘉納先生が東京高等師範学校の校長を辞したのは1920年（大正9）1月のことである。附属中学校に保管されている「甲南」の雅号が付された「善應用心身之力者謂之柔道」の書は、1918年（大正7）か1919年（大正8）頃の揮毫と思われる。この時期に「有効」や「能く」が「善く」に変化してゆく一つの要因には、クーベルタン男爵の思想と嘉納先生の修養哲学との間に阿吽の思想交流があったように思えてならないのである。1922年（大正11）に機関誌「有効乃活動」は「大勢」となるが、その4月号で『精力の最善活用』が唱えられ、1923年（大正12）には講道館文化会の結成となり、その12月には『自他共栄精神最善活用論』と題する講演がなされた。藤堂先生によると「大正末になると、嘉納は＜精力善用自他共栄＞の思想を国民に知らせるだけではなく、精力善用の趣旨に基づいた国民体育を拵えようと考えた」とされる。[22]「精力善用・自他共栄」の理念は、字義どおり「大勢」となって国内に広がり始めたのであった。その普及の早さと広さの故にか、嘉納先生の言葉からクーベルタン男爵の香りが限りなく希薄化し、先生とクーベルタン男爵との思想的絆が見失われてしまったように思えるのである。そしてまた、同様にして、クーベルタン男爵の向上心の哲学も競技主義や勝利至上主義の中で希薄化し、オリンピックのモットー「より速く、より高く、より強く」も、自分と世界を一歩でも「善き」ものへと向上させるという本来的な意味理解を希薄化させているように思えるのである。

参考文献

1 嘉納治五郎の雅号には「甲南」(60歳以前),「進呼齋」(60歳代),「帰一齋」(70歳以後) がある. この点については入江康平名誉教授のご教授を受けた. また, この点は藤堂良明著,『柔道の歴史と文化』, 不昧堂, 平成19年9月, 163頁を参照.

2 「第5章　精力善用・自他共栄の精神」,『嘉納治五郎大系　第12巻　写真集』所収, 講道館監修, 本の友社, 1988年5月, 212頁.

3 嘉納治五郎 「嘉納治五郎著作選　第3巻」, 五月書房, 1992年, 408頁. 松本芳三は「講道館柔道の技術的基礎は, 明治二十年頃固まったが, 精神的方面が精力善用・自他共栄に進んだのは, 大正十一年である」としている.

4 同上書, 14頁.

5 前掲書, (『嘉納治五郎大系』), 212－213頁.

6 前掲書, (『嘉納治五郎著作選』), 13頁.

7 老松信一,『改定新版　柔道百年』, 時事通信社, 昭和51年6月, 111－112頁.

8 藤堂良明,『柔道の歴史と文化』, 不昧堂, 平成19年9月, 165頁.

9 前掲書 (藤堂良明), 164－165頁. 藤堂先生は, 1889年（明治22）9月から1891年（明治24）1月に及んだ嘉納先生の最初のヨーロッパ

旅行で,先生が両者と出会った影響というよりも，1920年に訪欧してブイッソンと再会して受けた「宗教を離れた道徳」によって協調してゆくという考え方が大きな影響を与えた,としている.

10 Coubertin, Pierre de. L'Éducation Athlétique, in Association pour l'Avancement des Sciences. Paris, Masson 1889, pp.15-25. (Pierre de Coubertin, Olympism, Selected Writings, Editing Director: Nobert Mueller, IOC, Lausanne, 2000, p.129.

11 Ibid., L'Edcation Athletique, pp.15-25. (Olympism, p.129.)

12 Coubertin, Baron Pierre de., Notes sur L'Éducation publique, Paris, Librarie Hachette, 1901, pp.152-173. (Editing Director, Norbert Mueller, Pierre de Coubertin, Olympism, Selected Writings, IOC, Lausanne, 2000, pp.147-148.)

13 清水重勇,『フランス近代体育史研究序説』不昧堂出版，昭和61年10月，201頁.

14 同上書，218頁.

15 同上書，220頁.

16 同上書，220頁.

17 「『体育の父』本邦最初の光栄あるオリンピック委員としての嘉納先生および最後のカイロ行」,『嘉納治五郎大系』，講道館，1988年2月，236－256頁.

18 嘉納先生はローザンヌで1913年に行われたスポーツ心理学の会議に言及しているが,その会議の開催が5月8日であることから，先生の帰国後に開催された会議であることから,出席していなかった。しかし，その情報は入手していたと考えられる.（ピエール・ド・クーベルタン，大島謙吉訳、『オリンピックの回想』，ベースボール・マガジン社，昭和37年6月，125－131頁.）

19 「欧米巡視所感－体育の方針」,『嘉納治五郎大系』，第8巻，10－11頁.

20 同上，12－15頁.

21 嘉納治五郎,『嘉納治五郎著作集』第二巻，五月書房，1992年，13－14頁.

22 Coubertin, Pierre de. Les Jardins de l'effort, in Almanach olympique pour 1918. Lausanne, p.4. (Pierre de Coubertin, Olympism, Selected Writings, Editing Director: Nobert Mueller, IOC, Lausanne, 2000, p.44.)

23 Eyquem, Marie-Térèse. Pierre de Coubertin, l'épopée olympique, Paris, 1966, p.268. （清水重勇，前掲書，不昧堂，214）

24 Coubertin, Baron Pierre de. Pédagoie sportive, histoire des exercices sportifs, technique des exercices sportifs, action morale et sociale des exercices sportifs. 1919, p.7. クーベルタンの『スポーツ教育学』についての概説はの清水重勇の「クーベルタン『スポート教育学』」，松田岩男，成田十次郎編，『人間の教育を考える 身体と心の教育』講談社，昭和56年12月，116－133頁を参照. 清水の訳は「スポートは，危険を冒すことをおそれず進歩の欲求に促される強度の筋肉的運動の,自由意思による日常的な祭祀である.」尚,近藤等の訳は「ピエール・ド・クーベルタンにとってはスポーツとは<進歩の願望に依存する強度の筋肉的努力の自発的,習慣的崇拝であって,危険な程度にまで達し得るもの>であった」となる.（ベルナール・ジレ，近藤等訳，『スポーツの歴史』，文庫クセジュ，白水社，1952年8月，18頁）

25 前掲書（藤堂），165頁.